

## &lt;学術論文&gt;

サイバネティック・フィクションとしての *Oz* シリーズ

## —生物と機械の境界—

金子史彦 信州大学教育学部言語教育講座

キーワード：フランク・ボーム, サイバネティック・フィクション, メカニカル・マン

## 1. 序章

*The Wizard of Oz* に始まる L. Frank Baum の *Oz* シリーズは児童文学として世界中で愛読されている。しかしながら、それは生物と機械の境界というテーマを扱ったサイエンス・フィクション, サイバネティック・フィクションの先駆者の一つと見なすことも可能である。*Oz* の一連の作品群には生物の体から生まれたのではなく、製造されたキャラクターが幾体か登場する。それだけに留まらず、それらが生命を持つ生物であるのか、あるいは生命を持たぬ物体であるのか、という言及が作品中に見られる。本稿では、*Oz* シリーズにおいて、生命を持つものと持たぬものの区別がどのようになされているのかを論じる。その際、銅製の Tik-Tok に特に焦点が当てられることになる。なぜならこのキャラクターは、生命を持たぬ物体であるという理由で生物より下位に位置づけられるメカニカル・マンの役割をはたしているからである。そうして *Oz* シリーズにおける生命の定義について論じた上で、この作品をサイバネティック・フィクションの先駆的作品と位置付ける。そうすることにより、一見牧歌的な *Oz* の世界の裏側に隠されている、生物と機械の秩序の恣意性・流動性といったテーマを考察するのが本稿の目的である。

## 2. Tik-Tok, 生命を持たぬメカニカル・マン

Tik-Tok と Tin Woodman という二体の金属製のキャラクターは、生命を持つか否かという点で対照をなしている。共に金属製の体を持ちながら、作品中でたいていの場合 Tin Woodman は生きているが Tik-Tok は生きていないと捉えられている。作品に Tik-Tok が初めて登場した時、カンザス出身の少女である Dorothy は次のように述べる。

“I knew a man made out of tin, who was as alive as we are, 'cause he was born a real man, and got his tin body a little at a time—first a leg and then a finger and then an ear—for the reason that he had so many accidents with his axe, and cut himself up in a very careless manner. . . . But this copper man . . . is not alive at all, and I wonder what it was made for, and why it was locked up in this queer place.” (Baum, 1985, p. 54)

これを見ると、この Tik-Tok が生きていない物体で一方 Tin Woodman は生物であるという

のは作中世界で常識のようである。“The Road to Oz”では全知全能の視点から語っているナレーター自身が、Tin Woodman と異なり Tik-Tok は機械に過ぎないため、人々は彼を愛しはしない、ミシンや自動車を愛することはないのと同様に、と述べている。

The copper man and the tin man were good friends, and not so much alike as you might think. For one was alive and the other moved by means of machinery; one was tall and angular and the other short and round. You could love the Tin Woodman because he had a fine nature, kindly and simple; but the machine man you could only admire without loving, since to love such a thing as he was as impossible as to love a sewing-machine or an automobile. (Baum, 2007, p. 151)

Tik-Tok の肩の間に架けられたカード自体にも、これは非常に有能なメカニカル・マンであるが生きてはいない、ということが明記されている：“Smith & Tinker’s Patent Double-Action, Extra-Responsive, Thought-Creating, Perfect-Talking Mechanical Man Fitted with our Special Clock-Work Attachment. Thinks, Speaks, Acts, and Dose Everything but Live” (Baum, 1985, p. 55)。

Tik-Tok は生命を持つキャラクター達から、全く異なる存在として認識されているだけでなく、見下されることも多い。初対面の時、Tin Woodman は、Tik-Tok は彼や藁から作られた友達の Scarecrow より劣る存在である、と面と向かって宣告し (“Then,” continued the Tin Woodman, “I regret to say that you are greatly inferior to my friend the Scarecrow, and to myself. For we are both alive, and he has brains which do not need to be wound up, while I have an excellent heart that is continually beating in my bosom”), Tik-Tok 自身もそれを認めて “I con-grat-u-late you . . . I can-not help be-ing your in-fer-i-or for I am a mere ma-chine” (Baum, 1985, p. 115) と答える。Tik-Tok of Oz で登場する Ann Soforth は、彼女自身を含む人間より卑しい時計仕掛けの Tik-Tok が丁重に扱われるのに気分を害する (Baum, 1994, p. 132)。

Oz シリーズには Tin Woodman 以外にも、我々の感覚からすると生命を持たないと思われるが作品内では「生きている」ことになっているキャラクターが登場する。まず Scarecrow である。作中で彼は生きているものとして問題なく受け入れられているが、なぜこのような藁で作られたものが生きているのか全く説明はなされていない。次に Jack Pumpkinhead, Sawhorse, Gump, 彼等は元来物体であったが命の粉によって生を受けた。特に Sawhorse に関しては明確に生きているか否かに関する言及がなされている。彼と初めて対面した Dorothy が “What a remarkable thing, to be alive!” と叫ぶ。それに対して Sawhorse も “I quite agree with you . . . A creature like me has no business to live, as we all know. But it was the magic powder that did it, so I cannot justly be blamed” (Baum, 1985, p. 138) と答えるのである。彼等は Tik-Tok と異なり、生きているのである。

### 3. メカニカル・マンは感情を持たないのか？

Tik-Tok は他のキャラクターと区別されるだけでなく、劣る存在と見なされている。その根拠とされているのは Tik-Tok が「生きていない」ということである。よって、何が Tik-Tok を他のキャラクターと異なる存在にしているのかを尋ねることは、*Oz* の世界における命の定義を探ることでもある。Bruce Mazlish は、それは感情の有無に関係しているだろうと述べている(“What, then, distinguishes ‘him’ from humans? The answer seems to reside in the specifics cited, revolving especially around emotions, that is consciousness of a state of feeling” [Mazlish, 1993, p. 48])。感情はサイエンス・フィクションにおいてよく見られる人間の特徴であり、人間を機械と区別するものである。しかし *Oz* シリーズにおいては少し事情が異なるようだ。確かに Tik-Tok 自身が、自分はただの機械であるから感情を持たないということ述べている(“I am only a machine, and cannot feel sorrow or joy, no matter what happens” [Baum, 1985, p. 79])。しかしそれは疑わしい。Tik-tok, Scarecrow, それに Sawhorse といった不眠のキャラクター達が、生身の肉体を持つキャラクター達が寝静まっている夜をいかに過ごすかということが *Ozma of Oz* で描写されている(“Each night was rather a bore to the Scarecrow, Tik-tok and the Sawhorse; but they had learned from experience to pass the time patiently and quietly, since all their friends who were made of flesh had to sleep and did not like to be disturbed” [Baum, 1985, p. 188])。注目すべきは「Tik-Tok にとって退屈」であったが「忍耐強く」時間を過ごしたという記述である。これらは感情を表す表現ではないか。さらにここで Tik-Tok は、上で見たように、生きていると見なされている Scarecrow や Sawhorse と並列されているのである。

感情の有無といえば、Tin Woodman は心臓を失ったために愛に代表される感情をも失ってしまった、ということになっていた。一般的な解釈では、彼は本当に感情を失ったのではなく、自分自身でそう信じ込んでいただけであるのだが。それはさておき、感情を失ったはずの Tin Woodman であっても「生きていること」は何の疑いも無く認められていたわけである。こういったことから考えて、Tik-Tok は自分自身で感情を持たないと信じているだけであり、また *Oz* の世界では感情の有無は「生物」と「生命を持たない物体」の境界ではないと判断するのが適切である。

#### 4. 科学と魔法

それでは何がその境界なのであろうか。言い換えれば、Tik-Tok を他のキャラクターと区別しているものは何であろうか。二つ考えられる。一つは、彼等が科学によって製造されたか否かということである。作られた過程が科学の観点から合理的であれば、生命を持たぬ機械と見なされるということである。*Oz* の世界はこの世の科学では合理的に説明出来ない世界として描かれている。例えば Princess Langwidere は30個の取り換え可能な頭を持っていて、頭を付け替えると性格も変わるが記憶はそのままだったりするのである(Baum, 1985)。なぜ頭を取り外しても死なないのか、なぜ彼女の性格と記憶は連動していないのか等については合理的な説明は全くなされていない。そのような「不思議な」ことは *Oz* の

世界では当たり前なこととして受け入れられているのである。そういった奇想天外な世界であるから、「物体」が何故生きているのかを「科学的」な見地から問うことは無用である。我々から見れば奇想天外であっても、魔女が実在する、魔法が受け入れられている世界にあってはそうでないのであろう。とりわけ既にみたように、元来物体であった Jack Pumpkinhead, Sawhorse, Gump が魔法の力によって生を受けたことははっきりと述べられている。Tin Woodman や Scarecrow も魔法の世界故に生きているのであろう。彼等は製造されたのではなく、生を受けたのである。

一方、Tik-Tok は科学によって製造されたように描かれている。Paul A. Abraham と Stuart Kenter は *Oz* 世界における Tik-tok の特異性について述べている。

*Tik-Tok is produced technologically, even though he exists in a fictional world where most things come about by magic. Oz and other regions in the series are the simplistic, non-industrialized countries of wizardry. In these places, dinners and guns grow on trees. The factory-produced machine is alien to the nature of this world. (Abraham & Kenter, 1978)*

実際、*The Wizard of Oz* の作品中にもカンザス、つまりこの世と異なる “the simplistic, non-industrialized countries” であるが故に *Oz* の世界には魔法が存在するという言及がある。

*The Witch of the North seemed to think for a time, with her head bowed and her eyes upon the ground. Then she looked up and said, “I do not know where Kansas is, for I have never heard that country mentioned before. But tell me, is it a civilized country?” “Oh, yes,” replied Dorothy.*

*“Then that accounts for it. In the civilized countries I believe there are no witches left, nor wizards, nor sorceresses, nor magicians. But, you see, the Land of Oz has never been civilized, for we are cut off from all the rest of the world. Therefore we still have witches and wizards amongst us.” (Baum, 1993, p. 14)*

このように、科学の支配する合理的世界であるこの世と、魔法の支配する奇想天外な世界である *Oz* の世界と言う二項対立がある。

この二項対立を最も体現しているキャラクターは Wizard である。この魔法使いは実際には科学の世界であるアメリカの出身である。人々を *Oz* の世界からこの世に送り返すにあたって、彼は科学的な方法を用いた。まず、彼自身と Dorothy を送り返すために熱気球を使用した。その際、彼は熱気球がどのように浮かぶのかについて科学的に説明をしている。次に、“The Road to Oz” で、Button-Bright という少年を送り返すために、彼は巨大なシャボン玉を作る機械を発明して、使用した。その機械が作り出すシャボン玉はどのようにして長時間壊れずにいるのかということについて、もっともらしい科学的な説明がなされている。

*The Wizard had invented another thing. Usually, soap-bubbles are frail and burst easily, lasting only a few moments as they float in the air; but the Wizard added a sort of glue to his soapsuds, which made his bubbles tough; and, as the glue dried rapidly when*

exposed to the air, the Wizard's bubbles were strong enough to float for hours without breaking. (Baum, 2007, p. 176)

これら科学的な方法は、Dorothy がカンザスに帰るために採った方法、銀の靴や魔法のベルトと好対照をなしている。銀の靴や魔法のベルトがどのような仕組みで Dorothy を送り返すのかは全く説明がなされていない。魔法の世界の摩訶不思議な力が可能にする方法として受け入れられているだけである。

ここで思い出されるのは、Mary Shelly 著の *Frankenstein: or the Modern Prometheus* がサイバネティックスを扱った SF 作品の先駆の一つと見なされていることである。Patricia S. Warrick は述べる。

Several substantial works of nineteenth-century fiction can be seen as the literary antecedents of modern SF portraying machine intelligence. Two written early in the century and two written at the end of the century are worth study because they contain themes, metaphors, techniques, and questions that are significant in the contemporary SF about computers and robots. Their authors, fascinated with the possibility of artificial intelligence, also sense the audacity of man and the risk he takes in building automatons. The first work is Mary Shelly's *Frankenstein: or the Modern Prometheus* (1818). It is generally regarded as the first work of SF because its protagonist, Dr. Frankenstein, has been educated as a scientist, and he builds a creature not through any unexplained magic but through his knowledge of chemistry, anatomy, physiology, and electricity. (Warrick, 1980, p. 35)

Doctor Frankenstein が怪物を作る過程がまるで科学的な根拠があるかのように、もっともらしく描写されているため、言い換えれば怪物は魔法でなく科学によって生み出されたように描写されているため、それは怪物というよりサイボーグの一種のようにも見なすことが出来るのである。これは *Oz* における Wizard の採る方法の科学的な解説に相通じるものがある。

Tik-Tok は、魔法と対立する科学によって製造された。よって *Frankenstein* がサイバネティック・フィクションの一種と見なされるように、彼は生命を持たぬ機械と見なされる。

## 5. ネジを巻く作業

もう一つの考える生物と機械の境界、Tik-Tok が機械と見なされている根拠は、他人にネジを巻いてもらう必要があるということである。巻いてもらわないと動けないわけであり、独力で活動し始めることが出来ない。概ね Tik-Tok はその特徴ゆえに自分が生きているものよりも劣る存在であることを認めているが、一度 *Tik-Tok of Oz* の中で反論を試みたことがある。自分は体内に常に炎を宿し、その火が全ての活動の原動力であると述べる竜の Quox に、Tik-Tok は仲間意識を示す。

“Is there fire inside of you?” asked Shaggy.

“Of course,” answered Quox. “What sort of a dragon would I be if my fire went out?”

“What keeps it going?” Betsy inquired.

“I’ve no idea. I only know it’s there,” said Quox. “The fire keeps me alive and enables me to move; also to think and speak.”

“Ah! You are ver-y much like my-self,” said Tik-Tok. “The on-ly dif-fer-ence is that I move by clock-work, while you move by fire.” (Baum, 1994, pp. 146-47)

しかし、Quox はそれを直ちに論破し、自分は Tik-Tok のような生命を持たないロボットとは次元が異なると主張する。

“I don’t see a particle of likeness between us, I must confess,” retorted Quox, gruffly.

“You are not a live thing; you’re a dummy.”

“But I can do things, you must ad-mit,” said Tik-Tok.

“Yes, when you are wound up,” sneered the dragon. “But if you run down, you are helpless.”

“What would happen to you, Quox, if you ran out of gasoline?” inquired Shaggy, who did not like this attack upon his friend.

“I don’t use gasoline.”

“Well, suppose you ran out of fire.”

“What’s the use of supposing that?” asked Quox. “My great-great-great-grandfather has lived since the world began, and he has never once run out of fire to keep him going.” (Baum, 1994, p. 147)

Quox は、竜の体内の炎は恒久的なのに対して、ネジは巻いてもらわないと切れてしまい、Tik-Tok は活動出来なくなることを根拠に、自分と異なって Tik-Tok は生きていないと主張しているわけである。

ネジを他人に巻いてもらわないと全ての活動が出来なくなる、ということが Tik-Tok を無生物と見なす根拠である、という考えに対し、Mazlish は“Also according to Baum, Tiktok suffers from the defect of always having to be rewound (but this is merely a technicality; after all, humans have to eat)” (Mazlish, 1993, p. 48)と反論する。この、ネジを巻いてもらうことは人間の食べることに相当する、という考えはどうであろうか。Tik-Tok は自力でネジを巻くことが不可能である。他人を頼りにする、完全に受け身になるしかない。一方、一部の例外は除いて、生物は己の力を頼りとして自発的に食べる。結局、他人が生殺与奪の権を握っているのであり、それ故 Tik-Tok はネジを巻いてくれる人に対して卑屈なまでに従う外は無い。Tik-Tok 自身がそれを明言している。“From this time forth I am your o-be-di-ent servant. What-ev-er you com-mand, that I will do will-ing-ly—if you keep me wound up” (Baum, 1985, p. 62).

## 6. 基準の抜け穴

生物と機械を区別する第1の基準、それが科学によって製造されたか否かというものに関して注目すべき言説がある。本稿の第4章で、魔法使いが発明したシャボン玉製造機について見た。それは魔法と好対照をなす科学の産物として描かれていた。しかしその機械の大部分が隠れていたこともあって、通常のシャボン玉についての知識もないOz国の人々には本当の魔法のように見えたというのである。

He had invented a machine to blow huge soap-bubbles, as big as balloons, and this machine was hidden under the platform so that only the rim of the big clay pipe to produce the bubbles showed above the flooring. The tank of soapsuds, and the air-pumps to inflate the bubbles, were out of sight beneath, so that when the bubbles began to grow upon the floor of the platform it really seemed like magic to the people of Oz, who knew nothing about even the common soap-bubbles that our children blow with a penny clay pipe and a basin of soap-and-water. (Baum, 2007, p. 176)

熱気球の場合も同様であった。科学が全く知られていない世界では、彼の使用した科学的方法は魔法と信じられたのである。科学と魔法の区別は主観的なものに過ぎない、人がそれをどう捉えたかによって決まるのであるということが、ここで明示されているわけである。そうすると、科学によって製造されたのであるから Tik-Tok は生き物ではない機械である、とする考えも一つの見方に過ぎないことになる。それを支持するかのように、*Tik-Tok of Oz* の中で、Shaggy Man は Tik-Tok を弁護するかのようなことを述べる。

“Because you were so used to it all that you didn’t realize it was magic. Is anything more wonderful than to see a flower grow and blossom, or to get light out of the electricity in the air? The cows that manufacture milk for us must have machinery fully as remarkable as that in Tik-Tok’s copper body, and perhaps you’ve noticed that—” (Baum, 1994, p. 162)

この言説はOzシリーズにあって例外的な存在ではあるが、Tik-Tok が生きていない機械であり、また機械と生物をはっきりと区別できるという支配的な考えに一石を投じている。

もう一つの基準、Tik-Tok は他人にネジを巻いてもらう必要があるため機械と見なされる、というものについても注目に値するポイントがある。実は *Ozma of Oz* には Tik-Tok の他にもう一体、Smith & Tinker 社によって製造されたメカニカル・マンが登場する。それは Nome King の国を護るために鉄槌で地面を打ち続ける Iron Giant である。Nome King のために Iron Giant を製造したという事実は、Smith & Tinker 社が注文を受ければ誰とでも取引をする自由主義社会の企業である、という印象を強化する。Mazlish はこの Iron Giant について、Tik-Tok と異なり他人の助けを借りなくても動き続けることが出来るという点に注目している。

Another mechanical figure in the book, the Giant with the Hammer, *appears* not to suffer from this latter defect (in fact, he seems to continue until turned *off* by a key), though, unlike Tiktok, he has no thinking or speaking attachment. A gigantic “man” made out of plates of cast iron, he stands astride the only road into the Kingdom of the Nomes,

pounding the earth so that all are too scared to go past. (Mazlish, 1993, pp. 48-49)

この Iron Giant の動きを止める鍵は Nome King が持っているという。しかし生きている人間も他人の手によって殺される(動きを止められる)ことが有り得る。したがって、他人の助けを借りずして活動し続けることが不可能であることを根拠に Tik-Tok を機械と見なすならば、Iron Giant は生きていることになるのであろうか。一方では、Tik-Tok と異なり考えたり話したりすることは不可能である。製造者、あるいは彼の生殺与奪の権を握っている Nome King が入力した行動を繰り返すのみなのだ。つまり自分の意志ではなく、他人の意志によって行動するのである。

このようなことから考えると、Tik-Tok と Iron Giant のそれぞれのメカニズムを組み合わせれば、自分の意志で自由に考え行動し、かつ他人の助けを借りなくても動き続けることが出来るメカニカル・マンを製造することが可能なように思える。言い方を変えれば、科学によって Tin Woodman のようなものが生み出される可能性があるのである。もしもそのようなメカニカル・マンが製造されたとしたら、それを「生きていない機械」であると見なす説得力のある根拠が存在するであろうか。第1の基準、科学によって製造されたものは全て機械であるという定義に抵触するかもしれない。しかしながら、科学と魔法の境界も主観に左右される流動的なものであることは、既に見た。

恒常的に自由意思で動き続けられるメカニカル・マンは、Tik-Tok や Iron Giant のように、主人である人間に忠実に従うであろうか。Oz シリーズは、そういった事態を恐れた人間の、生物と機械を区別しようとする努力、あるいは後者を前者に従属させようとする努力を描いているのであろうか。少なくとも、結果として、生物と機械の境界の曖昧さが浮き彫りになっている。一見牧歌的に見える Oz の世界は、機械が人間に従わなくなる反ユートピアの可能性を示唆しているのかもしれないのである。

## 7. より進化した種としてのメカニカル・マンの可能性

*The Tin Woodman of Oz* で、Tin Woodman と Scarecrow は生身の人間に対する彼等の優越性を主張する。

“Were the Scarecrow and I alone,” said the Tin Woodman, “we would travel by night as well as by day, but with a meat person in our party, we must halt at night to permit him to rest.”

“Meat tires, after a day’s travel,” added the Scarecrow, “while straw and tin never tire at all. Which proves,” said he, “that we are somehow superior to people made in the common way.” (Baum, 2005, p. 14)

彼等が、生身の人間に対して自分たちが優っている点として挙げるものは、全て機能面である。これらは、多くのサイエンス・フィクションにおいても、人間には無い、メカニカル・マンの好ましい特性として描かれている。Oz の世界では、Tin Woodman や Scarecrow のように物体から作られた「人間」だけでなく、生身の人間自身にもそういった優位点を

認めている者がいる。例えば、Tin Woodman と Tin Soldier を制作した鍛冶屋である Ku-Klip は、“I am sure their tin bodies are a great improvement on their meat bodies”(Baum, 2005, p. 100)と述べる。Tin Woodman の婚約者であった Nimmie Amee は、Tin Woodman のようないくら労働をしても疲れない、食事をとったり眠ったりする必要も無い男と結婚すれば、自分は生身の男と結婚するよりもずっと幸せになれると言う。

“You will make the best husband any girl could have. I shall not be obliged to cook for you, for now you do not eat; I shall not have to make your bed, for tin does not tire or require sleep; when we go to a dance, you will not get weary before the music stops and say you want to go home. All day long, while you are chopping wood in the forest, I shall be able to amuse myself in my own way – a privilege few wives enjoy.” (Baum, 2005, p. 7)

Nimmie Amee は機能的な面、多くのサイエンスフィクションで描かれているメカニカル・マンの人間に勝る面のみを理由として、Tin Woodman を理想の旦那と主張しているのである。そういった利点を誇る一方、Tin Woodman は一般的にメカニカル・マンの欠点とされるもの、例えば感情の欠如等からは免れている。そして、本稿で再三見てきたように、彼が生きているということは何の疑いも無く受け入れられている。よって、Tin Woodman は、機能面に関してより有能であるから生身の人間に勝り、生きているからメカニカル・マンに勝るということになる。

Tik-Tok は Tin Woodman と同じような機能面の長所を持っていた。それゆえ、Nome King が傷めつけようとしても Tik-Tok は無事であった。しかしながら、生きていないがために人間よりも劣る存在であると見なされた。Tik-Tok が生きていないとする二つの考えられる基準については、既に、抜け穴があることを見た。そして Tik-Tok と Iron Giant の長所を合わせて、自分の意志で考え、喋り、動き、恒久的に活動できるメカニカル・マンが製造されたら、生身の人間は彼を Tin Woodman と同様な進化した人間と見なさないわけにいかなくなるのではないか。

Mazlish もまた、進化した人間としての機械、という考えについて論じている。

If one takes Darwin seriously and accepts that human is in an evolutionary relation to the other animals; adds to the idea, advocated by Huxley . . . , that the animals are animal-machines and humans therefore the same . . . , admits that humans then create machines, including Babbage-like computers, which are merely consciously contrived versions of the animal-machine . . . ; then one can conclude that we are on an evolutionary continuum, with machines as a new, and possibly advanced, species. (Mazlish, 1993, p. 155)

Mazlish は動物が機械と見なされるという前提から論を進めている。Oz の世界では、前に見た Shaggy Man のコメントを除き、動物と機械は明確に区別されている。「機械」が人間の進化形と見なされているのではなく、Tin Woodman のように生きている人間であると認

められた者が、生身の人間が進化した形と見なされるのである。そして Tin Woodman や Scarecrow は自らの優位性を誇りながら、自分たちをあくまでも生身の人間たちと同じ側の「生きている人間」と位置付け、Tik-Tok のような機械とは別種であると宣言する。よって、人間と機械の秩序は保たれている。無機物の体を持つ故に生身の人間より有能な存在も「人間」なのであるから、人間と機械の地位が逆転するわけではない。

## 8. 結論

Tik-Tok と Iron Giant の雑種のような、欠点のないメカニカル・マンが製造可能であれば、それらは生きている人間として認められるのか、という疑問に対して、Oz シリーズは答えを出してはいない。サイバネティック・フィクションが本格的に書かれるようになるよりはるか以前の作品であるから、それも自然であろう。しかし、生物と機械の間に一線を引きメカニカル・マンを見下す人々の態度は明確に描かれている。また、見てきたように、生物と機械の境界の流動性や恣意性についても色濃くほめかされている。流動的な境界をもって、メカニカル・マンと同じく金属製の Tin Woodman たちを人間とすることで、今のところは秩序が保たれている。将来、完璧なメカニカル・マンが科学によって製造されたら、生物と機械の秩序がどうなるのかは未知数である。よって、作品のコンテキストにおいてですら、一見牧歌的に見える Oz の世界は東の間のものに過ぎないとも言うことが可能である。Oz シリーズはサイバネティック・フィクションの先駆者なのだ。

## 引用文献

- Abrahm, A. Paul and Stuart Kenter. "Tik-Tok and the Three Laws of Robotics." *Science Fiction Studies* 5, part 1 (March 1978): 67-80,  
 <<http://www.depauw.edu/sfs/backissues/14/abrahm14art.htm>>.
- Baum, L. Frank. *Ozma of Oz*. New York: Dover Publications, Inc., 1985.
- . "The Road to Oz." In *Adventures in Oz Vol. II*. Radford, VA: Wilder Publication, 2007.
- . *The Tin Woodman of Oz*. USA: Dodo Press, 2005.
- . *The Wizard of Oz*. Hertfordshire: Wordsworth Classics, 1993.
- . *Tik-Tok of Oz*. New York: Dover Publications, Inc., 1994.
- Mazlish, Bruce. *The Fourth Discontinuity: The Co-Evolution of Humans and Machines*. New Haven: Yale UP, 1993.
- Warrick, S. Patricia. *The Cybernetic Imagination in Science Fiction*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1980.

(2009年5月26日 受付)

(2010年1月20日 受理)